

## チェコ研究のための基本文献

日本語で読めるチェコ（ボヘミア諸邦）、スロヴァキアについての文献は、必ずしも多くはありません。しかし、ボヘミア王国は長らく神聖ローマ帝国、ハプスブルク帝国の重要な中心だったので、チェコ史を理解するには、チェコ地域に限定せず、こうした帝国の枠組みで研究を進めることが大切です。また、チェコは第二次世界大戦後、1989年まで社会主義東ヨーロッパの一部だったので、この時期について考えるときには、「東欧」という枠組みでも文献を探してみましょう

### 〈事典〉

#### 1. 伊東孝之ほか編、『[東欧を知る事典](#)』、平凡社、1993年、[2001年（新訂増補版）](#)

ほとんどの項目は、出版年までの研究成果を反映した書き下ろし。東欧地域で出会う個別項目のほか、「住居」、「食事」、「酒」、「農業」などの一般的な事項、「修道院」、「少数民族」、「住民交換」などの一般歴史事項の記述を通して、「東欧」の地域の特徴を描き出そうとしている点に特徴があり、「引く」だけでなく、「読む」楽しさがある事典。巻末の東欧地域論総論、各国別の記述、文献目録も充実している。

#### 2. ニーデルハウゼル・エミル、『[総覧 東欧ロシア史学史](#)』、北海道大学出版会、2013年

ハンガリーの碩学、ニーデルハウゼルによる史学史研究。正確には事典ではないが、第二次世界大戦までの東欧の歴史学の発展について各国別に綿密で網羅的な記述がなされており、百科事典的な性格を持つ。

#### 3. Magocsi, Paul Robert, *Historical Atlas of Central Europe*, University of Washington Press, 2002 (revised and expanded edition)

★図書館では、[Thames & Hudson社（2002年）](#) 刊行分を所蔵

古代から現代にいたる「中央ヨーロッパ」の歴史地図（第一版では、[Historical Atlas of East Central Europe](#)というタイトルだった）。この種の歴史地図としては決定版といってもよいが、残念ながら絶版。

### 〈専門雑誌〉

#### 1. 『東欧史研究』、東欧史研究会発行

日本の東欧史研究の拠点学会である東欧史研究会が発行している。東欧史研究会のホームページでバックナンバーの目次をみることができる。

## 2. Central European History, Cambridge University

興味深い論文が掲載されているほか、書評、文献紹介が充実しており、英語圏の研究を概観するのによい。本学のインターネットを経由して、アクセスすることができる。

### 〈入門書・通史〉

#### 1. 南塚信吾 (編)、『[ドナウ・ヨーロッパ史](#)』、山川出版社、1999年

山川出版社が発行している世界各国史の旧版「東欧史」を引き継いだのは、『[バルカン史](#)』、『[ポーランド・ウクライナ・バルト史](#)』、それに本書である。「ドナウ・ヨーロッパ」として理解されるのは、基本的には1918年に消滅したオーストリア=ハンガリー帝国の領域である。巻末の文献案内を参照のこと。

#### 2. 大津留厚ほか (編)、『[ハプスブルク史研究入門](#)』、昭和堂、2013年

網羅的な研究入門ではなく、近世から20世紀までのハプスブルク帝国史研究において、重要な研究テーマを個別に取り上げ、問題のアウトラインを示している。ハプスブルク帝国史全体を見通す研究のハンドブックとしては、Robert A. Kahn, [A History of Habsburg Empire, 1526-1918](#), University of California Press, 1980が、依然として役に立つ。

#### 3. 大津留厚、『[ハプスブルク帝国](#)』、山川出版社、1996年

19世紀のハプスブルク帝国史について、簡潔に問題点を示したブックレット

#### 4. 大津留厚、『[ハプスブルクの実験—多文化共存を目指して](#)』、中公新書、1995年（[増補改訂版](#)、春風社、2007年）

言語問題（「民族問題」）を中心に19世紀のハプスブルク帝国史を論じる。

#### 5. コーン, ハンス、『[ハプスブルク帝国史入門](#)』、恒文社、1982年

★図書館では、[第1版4刷](#)（1993年刊）を所蔵

#### 6. テーラー, A.J.P.、『[ハプスブルク帝国 1809-1918](#)』、筑摩書房、1987年

#### 7. シュタットミュラー、『[ハプスブルク帝国史—中世から1918年まで](#)』、刀水書房、1989年

#### 8. スケッド, アラン、『[図説ハプスブルク帝国衰亡史—千年王国の光と影](#)』、原書房、1996年

9. ベラー, スティーヴン、『[フランツ・ヨーゼフとハプスブルク帝国](#)』、刀水書房、2001年

10. オーキー, ロビン、『[ハプスブルク君主国 1765-1918](#)』、NTT出版、2010年

近年、ハプスブルク帝国史については、個別研究で大きな進展が見られる。ただその分、この広大な帝国の歴史を全体として見通すことはますますむずかしくなっている。また、帝国の中心に位置したチェコ地域から帝国全体の歴史を概観するような著作はいまだ存在しない。5 から 10 にあげたのは、日本語で読むことのできるハプスブルク帝国の通史の主なものである。5 は複雑な 19 世紀史について簡潔に見取り図を示してくれる。6 は、第二次世界大戦の破局のなかで構想されたものであり（原著の出版は 1948 年）、時代的な限界も含めて興味深い。8 は、帝国崩壊の歴史について、たいへんバランスのとれた叙述である。10 は、啓蒙改革期から帝国崩壊までの歴史を、最新の研究成果を踏まえて叙述している。帝国東半分（ハンガリー）について詳しい。同じ著者（ロビン・オーキー）による『[東欧近代史](#)』、勁草書房、1987 年も参照のこと。

ハプスブルク帝国の歴史については、華やかで影のあるロマンティックなイメージから日本では多くの書籍が刊行されているが、人物伝を中心とした歴史読み物的なものが多く、学術的ではない。ただし、以下のものは研究書として有用：

ハーマン, ブリギッテ、『[エリーザベト 美しき皇妃の伝説](#)』、上下巻、朝日新聞社、2001年。

11. シュガー, P.F., レデラー, I.J. (編著)、『[東欧のナショナリズム 歴史と現在](#)』、刀水書房、1981年。

東欧におけるナショナリズムの展開とその特徴を各国（各国民）別に論じる。ナショナリズム論をめぐる現代の研究水準からすると、視点の古さも感じられるが、「東欧」研究には不可欠の文献。

12. ロスチャイルド, ジョセフ、『[大戦間期の東欧—民族国家の幻影](#)』、刀水書房、1994年  
13. ポロンスキ, アントン、『[小独裁者たち—両大戦間期の東欧における民主主義体制の崩壊](#)』、法政大学出版会、1993年

12、13 は、第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の時期の東欧について、各国別に論じている。政治的、社会経済的な脆弱さに焦点が当てられる。

14. ロスチャイルド, ジョセフ、『[現代東欧史—多様性への回帰](#)』、共同通信社、1999年  
15. フェイト, フランソワ、『[スターリン以後の東欧](#)』、岩波現代選書、1978年

16. フェイト, フランソワ、『[スターリン時代の東欧](#)』、岩波現代選書、1979年

14～16は社会主義時代の東欧現代史を論じる。東欧の20世紀史は、1989年の体制転換以後、大幅に書き換えられつつあるが、それを総合する通史を書くことは今後の課題である。

17. 薩摩秀登 (編著)、『[チェコとスロヴァキアを知るための56章](#)』、明石書店、2003年、

★図書館では、[第2版 \(2009年\)](#) も所蔵

若手研究者を中心として書かれた刺激的なハンドブック。チェコとスロヴァキアの歴史と現在を知るために選ばれた56のトピックにそれぞれ4～5ページをあて、重要なポイントを簡潔に示す。

18. 薩摩秀登、『[物語 チェコの歴史—森と高原と古城の国](#)』、中公新書、2006年

19. 薩摩秀登、『[図説 チェコとスロヴァキア](#)』、河出書房新社、2006年

〈テーマ別一般書・専門書〉

A. プラハ論

1. 『[プラハ—ヤヌスの相貌](#)』(ドイツの世紀末第二巻)、国書刊行会、1986年
2. 平野嘉彦、『[プラハの世紀末 カフカと言葉のアルチザンたち](#)』、岩波書店、1993年
3. 三谷研爾、『[世紀転換期のプラハ—モダン都市の空間と文学的表象](#)』、三元社、2010年
4. 阿部賢一、『[複数形のプラハ](#)』、人文書院、2012年
5. フリンタ, E., ルカス, J., 『[プラハ カフカの街](#)』、成文社、2008年
6. クラール, ペトル、『[プラハ](#)』、成文社、2006年
7. 薩摩秀登、『[プラハの異端者たち—中世チェコのフス派にみる宗教改革](#)』、現代書館、1998年
8. 千野栄一、『[プラハの古本屋](#)』、大修館書店、1987年
9. 石川達夫、『[黄金のプラハ](#)』、平凡社、2000年
10. 田中充子、『[プラハを歩く](#)』、岩波新書、2001年
11. 田中長徳、『[屋根裏プラハ](#)』、新潮社、2012年

プラハはカフカが生まれ、創作した町として、日本ではまずドイツ語文学研究のなかで論じられてきた。1は、プラハで書かれた、あるいはプラハを舞台としてかかれたドイツ語文学作品のアンソロジーで、非常に貴重なものである。3は、日本でのプラハのドイツ語文学研究として最高の到達点を示すものだろう。この本は、ドイツ語文学とプラハの都市空間とが切り結んだ、いわば文学テキストと現実社会との接点を論じたもの

として、成功している。

4～6は、チェコ語の空間とドイツ語の空間を横断しながら、プラハを論じている。4は、文学テキストから発想しながら、あらゆるジャンルの芸術をまたぎ、都市空間を縦横に飛び回る、いわばプラハに場をおいたチェコ芸術論。7は、フス派の歴史を中心としながらも、中世から宗教改革期までのプラハの都市史として読むことができる。8は、長年プラハで一般言語学・スラヴ語学を学んだ言語学者によるエッセイ。社会主義時代にも力強く息づいていたチェコの文化に触れることができる。9は学術的プラハ散歩。10は建築史、中でも分離派建築（アールヌーヴォー）を専門とする著者のプラハ建築エッセイ。11はプラハにアトリエを構えた写真家によるフォト・エッセイ。

なお、中央ヨーロッパの都市論としては、以下の二つの著作が重要であり、際立っている。残念ながら、英語、ドイツ語、チェコ語でも、これらに匹敵するプラハ論は、まだ現れていない。

ショースキー、カール、『[世紀末ウィーン](#)』、岩波書店、1983年

ルカーチ、ジョン、『[ブダペストの世紀末 都市と文化の歴史的肖像](#)』、白水社、2010年（新装版）

★図書館では [初版](#)（1991年刊行）を所蔵

## B. 歴史

12. 石川達夫、『[チェコ民族再生運動—多様性の擁護、あるいは小民族の存在論](#)』、岩波書店、2010年
13. 石川達夫、『[マサリクとチェコの精神—アイデンティティと自律性を求めて](#)』、成文社、1995年
14. 福田宏、『[身体の国民化—多極化するチェコ社会と体操運動](#)』、北海道大学出版会、2006年
15. チャペック、カレル、『[マサリクとの対話—哲人大統領の生涯と思想](#)』、成文社、1993年
16. 林忠行、『[中欧の分裂と統合 マサリクとチェコスロヴァキア建国](#)』、中公新書、1993年
17. 中田瑞穂、『[農民と労働者の民主主義—戦間期チェコスロヴァキア政治史](#)』、名古屋大学出版会、2012年
18. 林忠行、『[粛清の嵐と「プラハの春」—チェコとスロヴァキアの40年](#)』、岩波ブックレット、1991年
19. ハヴェル、ヴァーツラフ、『[反政治のすすめ](#)』、恒文社、1991年

20. ハヴェル、ヴァーツラフ、『[プラハ獄中記 妻オルガへの手紙](#)』、恒文社、1995年

21. ハヴェル、ヴァーツラフ、『[ハヴェル自伝—抵抗の半生](#)』、岩波書店、1991年

チェコに関する歴史研究として広がりを持った専門書、一般書をあげた。12、13は、定型的な民族復興史観に著者の哲学的考察を接木した該博なエッセイで、歴史研究の立場からすると批判的な読みが必要となろう。14は19世紀後半のチェコ社会の発展、民族主義の展開を体操運動から論じた専門書。15は、小説家カレル・チャペックによるマサリク伝。チャペックがマサリクと交わした長時間の対話を再構成したもので、チェコ近現代史論として読むことも、マサリク伝として読むことも、あるいはチャペックの創作作品として読むこともできよう。訳文は流麗。16のマサリク論と合わせて読むと、歴史の理解が立体的になるだろう。

17は政治学者による詳細な戦間期チェコスロヴァキアの政治分析。時代の挑戦にチェコスロヴァキア政治がどのように対応しようとしたのか、詳細に分析されている。18は重要な論点を網羅しつつ、簡明に「プラハの春」を描いている。19～21は、社会主義時代チェコの異論派運動の中心にあり、体制転換後、チェコスロヴァキア（のちにチェコ）大統領となったヴァーツラフ・ハヴェルの著作。現代史研究は、いまもっとも刺激的でダイナミックな展開を遂げている分野だが、その成果を総合するような歴史書はまだ書かれていない。同時代の様相、雰囲気、何が問題とされたのか、それを知るには依然として、当事者であるハヴェルの著作・論考がもっとも有益である。なお、ハヴェルは劇作家だった。

### C. 文学・芸術

20. ニェムツォヴァー、ボジェナ、『[おばあさん](#)』、岩波文庫、1971年

21. ハシェク、ヤロスラフ、『[兵士シュヴェイクの冒険](#)』、全4巻、岩波文庫、1972～74年

22. カフカ、フランツ、『[審判](#)』、白水社、2001年（ほかにもたくさんの翻訳がある）

22. チャペック、カレル、『[山椒魚戦争](#)』、ハヤカワ文庫 SF、1998年

★図書館では [岩波文庫版](#)（1978年刊行）を所蔵

23. クンデラ、ミラン、『[冗談](#)』、みすず書房、1992年

24. フラバル、ボフミル、『[わたしは英国王に給仕した](#)』、河出書房新社、2010年

ニェムツォヴァーの『[おばあさん](#)』は、民族復興期の代表的作品として、チェコの人々が必ず学ぶ（しかし必ずしも面白いと思うばかりではない）小説である。

『兵士シュヴェイクの冒険』は、チェコ語文学としてもっともよく知られ、また、その主人公、「ヨーゼフ・シュヴェイク」はしばしば「典型的なチェコ人」として戯画化されている。ユーモア小説とも、反戦小説とも、または抵抗小説ともいわれるが、その

作品世界は、陽気な語調のシニシズム、不条理に覆い尽くされている。

ほとんど一生をプラハで過ごしたカフカの作品は、そのすべてが日本語に訳されている。『[審判](#)』をはじめとして、『[城](#)』や『[変身](#)』といった作品は（『[城](#)』はプラハを舞台とはしていないが）、プラハの雰囲気濃厚に湛えている。ドイツ語文学については、Aの1や3を参照のこと。さて、フランツ・カフカは1883年にプラハに生まれ、1924年に死去した。ヤロスラフ・ハシェクは、1883年に生まれ、1923年に死去した。今日でこそ、一方はドイツ語文学の枠組みで、他方は「東欧文学」の枠組みで語られるが、この二人は同じ時代にプラハの空気を呼吸していたのである。『[兵士シュヴェイクの冒険](#)』には、『[審判](#)』と多くの共通点を見いだすことができる。

チャペックの作品も、クンデラの作品もほとんどが日本語に訳されている。チャペックのなかでは、『[R.U.R](#)』（岩波文庫、1989年）もよく知られているだろう。この作品のなかで人造人間を指す語として考えだされた「ロボット」という語は、世界中の言葉に受け入れられた。あるいは、子供のころに、『[長い長いお医者さんの話](#)』などに親しんだ人も多いただろう。クンデラの『[冗談](#)』や『[存在の耐えられない軽さ](#)』（河出書房新社、2008年）は、小説としてももちろん、社会主義期チェコスロヴァキアの社会を考えるのにも、非常に参考になる。チャペックやクンデラという国際的に著名な作家のほか、今日では、フラバルの作品をはじめとして、チェコ語小説は続々と日本語に訳出されている。

## 25. ウルヴェル、スタニスラフ（編）、赤塚若樹（編訳）、『[チェコ・アニメーションの世界](#)』、人文書院、2013年

チェコはアニメーション創作の大国として知られる。本書は、アニメーション作家や評論家たちの文章を集めたもので、その歴史に生き生きと触れることができる。

## 26. 内藤久子、『[チェコ音楽の歴史-民族の音の表徴](#)』、音楽の友社、2002年

同じ著者による『[ドヴォルジャーク](#)』（音楽の友社、2004年）、『[チェコ音楽の魅力](#)』（東洋書店、2007年）は、より一般向けのチェコ音楽史。歴史的・文化的背景についての記述は、定型的な「民族復興史」なので、批判的な検討が必要。伊東信宏、『[中東欧音楽の回路-ロマ・クレズマー・20世紀の前衛](#)』（岩波書店、2009年）と合わせて読むとよい。

(2014年4月 篠原 琢)

